

受験番号
算用数字

注意① 解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

注意② 字数が指定されている設問では、「」や「。」も一まず使いなさい。

1

次の文章は、聴覚障がいをもつ中学二年生の孝司(ぼく)が、病気で頭髪を失った中山の自宅を訪れる場面である。二人はあるテニスの大会でダブルスを組むことになったが、試合の直前になって突然、中山は練習に姿を見せなくなってしまった。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

「中山、いますか？」

中山の母親は不安そうな表情を浮かべた。

ぼくはもう一度繰り返した。けれど、誤った発音だらけのぼくの声が彼女に伝わるはずがなかった。

④ 覚悟はしていたことだった。

ぼくは手帳を取り出し、懸命に文字を書き付けた。

〈中山に会いに来ました。ぼくはあいつとダブルスを組んでいます〉

母親はその文字をのぞき込み、困ったように眉根を寄せた。どうしたらいいのか迷っているようだった。

〈試合があるんです。あさってダブルスの試合があるんです〉

ぼくは再び文字を書き、母親に突き出した。たぶん彼女はテニスの試合のことなど知らないのだろう。ただ驚いたような顔でぼくを見た。

どうにも⑥ 埒があかなかった。

⑤ ぼくは頭を下げると、そのまま靴を脱いだ。そして部屋に上がり込んだ。

母親は、ぼくを止めるわけでもなく、ただうろたえているだけだった。その弱々しさになぜか④ 無性に腹が立った。

台所の板間の先に部屋のドアが見えた。ドアの表面に外国のテニスプレイヤーの写真が貼ってある。ぼくはそのドアを開けた。

その部屋の奥にあるベッドの上に中山がいた。

寝っ転がって音楽でも聞いていたのだろうか、半身を起こしてぼくのほうを見上げると驚いた顔をした。頭にはあの時と同じようにバンダナを頭巾のように巻いていた。

坂井さんは、ぼくと中山がしっかりと話し合うことを安田コーチが望んでいると言った。

けれどぼくと中山がそんなふうにはわかり合えるまで話し合えるはずがなかった。ぼくとこいつの間には言葉という壁があったし、素直になれない理由がいくつもあった。

気が付いた時にはぼくはやつの胸倉をつかみ、ベッドの上から引きずり下ろしていた。

中山もぼくを弾き飛ばすように腕を振り回した。ぼくと中山は部屋の中央でにらみ合ってた立った。

やつの口が動いた。「この野郎」と中山が怒鳴っているのがわかった。

ぼくは怒りに駆られ、中山の胸倉を押し、壁のほうに思いっきり突き飛ばした。やつは背中から本棚にぶつかり、⑤ 崩れるように座り込んだ。

「ふざけんな、馬鹿野郎！」

ぼくは激しく手話を作り、中山の顔を指さした。

ゆっくりと言葉を作ることなどその時のぼくにはできなかった。伝わりうと伝わるまいと、もうどうでもよかった。

「おまえが誰にいじめられようが俺には関係ないんだよ！俺はテニスをしたいだけだ！ テニスをしたいんだ！」

中山は呆気にとられた顔で激しく手話で叫び続けるぼくを見上げていた。「いつまでここにいろんだ。さつさとコートに來い、試合があるんだぞ！ダブルスなんだ、俺ひとりじゃできないんだ、おまえがいなければならぬんだ！俺はおまえと組んで戦うんだ！」

ぼくの目の前で中山は本棚を背に力なく座り込んだままだった。ずっと部屋の中にいたのだろうか、ぼんやりとした生気のない顔をしている。視線の合わないこいつの目の奥に自分の姿は確かに映っているのだろうか。

不安に襲われた。ぼくの言いたいこと、伝えたいこと、そんなこと全てが中山にとって全く意味のないことで、こいつの住んでいる世界とは無縁のものになっているのではないかと思った。

その時、ぼくはこいつが涙を流していることに気付いた。中山は肩を震わせて泣いている。

くそっと思つた。

こんな時に泣いたりするな。おまえはすぐ怒ってばかりのむかつく野郎でいなくちゃいけないんだ。そして、テニスのことばかり考え、勝つことだけにこだわる自己中野郎でなければいけないんだ。

① ぼくは深く息を吸い、声帯を懸命に震わせた。喉の奥から声を引き出し、言葉を作った。

聾学校で幼い日から習い続けた発音方法を呼び起こした。なんとしてでも中山に伝えたかった。手話がわからないこいつに、こいつがわかる唯一の方法で伝えなければならなかった。

「まってる……から……。おまえが……くるのを……まってる、から……」その言葉があいつの耳に届いたのかどうか、ぼくには知りようもなかった。やつはまだ子どもみたいに泣き続けていた。

中山の母親が、困り果てた顔をしてそこにいた。仕事の時間が近づいているのだろう。時計をしきりに気にしていた。

ぼくは母親に一礼をすると、そのままふたりに背を向けた。ぼくにできることはもうそれ以上何もなかった。

出典 福田隆浩『熱風』

① ———の部分④・⑤の漢字の読みを書きなさい。

② 「⑥ 埒があかなかった」とあるが、これと同じような意味で使うことができることばとして適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 鼻持ちならない
- イ 抜き差しならない
- ウ 腰が重い
- エ 気が置けない

③ 「④ 覚悟はしていた」とあるが、どのような覚悟かを説明した次の文の X、Y に入れるのに適当なことばを、X は八字、Y は五字で、それぞれ文章中から抜き出して書きなさい。

ぼくの声は X であるため、Y に伝わらないだろうという覚悟。

④ 「⑤ ぼくは頭を下げると、そのまま靴を脱いだ。そして部屋に上がり込んだ」とあるが、このときの「ぼく」の心情について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア ただうろたえているだけの母親に発言させるためには、何か行動を起こさなければいけないと決心する気持ち。
- イ 自分の考えの正しさを証明するためには、多少の無礼はやむを得ないと思いながら、それでもやや気後れする気持ち。
- ウ 何が何でも中山と会って話し合おうと必死で、そのために母親の許しを得るのを待ってられないと急ぐ気持ち。
- エ 中山をかばう母親に同情はしながらも、それでも自分は正しいことを行っていると自信に満ちている気持ち。

⑤ 「① ぼくは深く息を吸い、声帯を懸命に震わせた。喉の奥から声を引き出し、言葉を作った」とあるが、この理由を説明した次の文の X に入れるのに適当なことばを、三十五字以内で書きなさい。

中山に X ことを何としても伝えて、以前の自分を取り戻してほしいと思っていたから。

⑥ この文章の表現の特徴とそのねらいについて説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 「ぼく」の視点で描くことで、自分の意思が伝わらないらだちを読者に伝える工夫がされている。
- イ 「ぼく」と中山、その母親の姿を客観的に描くことで、お互いを理解できない人間のむなしさを描写している。
- ウ 感情をぶつける「ぼく」と、冷静な中山を対比させることで、その後お互いに理解しあえることを暗示している。
- エ 部屋にいた中山の様子を丁寧に描写することで、ようやく中山に会えた「ぼく」のうれしさを印象づけている。

次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。なお、**1**～**5**は段落番号である。

**1**大分県東部の農山村を **A** 調査したことがある。三月 **a** マツのことで、**b** アタタかいその地方の山のあちこちでは山桜がすでに満開になっているのか、遠目には白く、明るく、丸いかたまりに **B** 見えていた。

**2**私が訪れた家の、世帯主の父親に当たる人はその頃六十歳代半ばだったが、インタビュ어의あと支度をして山へ **C** 出かけるという。それは桜の苗木を山に植えるためであった。その人は、自分の家の前の「マエヤマ」（家の正面に立った時に見える山の風景あるいは山そのもの）に見える桜の木は、自分の祖父が植えたものであり、今後生まれてくる孫や曾孫の代の人々が自分の植えた満開の山桜を楽しめるように、今のうちに桜の苗木を植えておくのだと言った。このムラは、深く峻しいというほどではないが、山また山に囲まれている。人々は、桜が咲く頃に山が緑一色では「山が淋しい」と **D** 言い、また、遠くにほの白く山桜が咲いているのを見ると、「ああ、山にも春が来た」と思うのだと語っていた。桜の寿命は五十年から七十年であり、まれには百年、二百年という老木になるものもあるが、多くは百年もたたずに枯れる。従って、時期を見て苗木を植えておかないと、数十年後にはマエヤマに山桜を見ることができなくなるということであった。

**3**「伝統的社会」と呼ばれるような社会に生きている人々は、自分の存在を独立した個別のものと考えず、むしろ、多くのものからいのちを受け継ぎ、そして別のものにそれを渡してゆく媒介的なものと考える傾向がある。自分が現在生きているのは、直接自分を産み育ててくれた父や母の存在があったからだけではなく、さらにその父母を産み育てたそれぞれの父や母がいたからだと考えて、自己の存在を幾世代にもさかのぼった遠い先祖と結びつけて認識している。それが一般に「**c** 祖先崇拜」と呼ばれるものである。祖先崇拜は、信仰や宗教活動として示されるだけではなく、人間が生きてゆくうえで依存している環境への関心やその保護という行為にも示されている。さらに、自分が生きていることの意味を考える手掛かりを、日常の生活の中の具体的な物や行為において求める。そのことが、同じ社会に生きて同様な生活体験を持つ人々は、自己の存在についてあるいはいのちについて **d** 同様の認識を持つという結果を生む。

**4**大分県のこのムラの人々は、今咲いている桜を見て、それを植えてくれた亡き祖父を思うことができるし、一方また自分が植えた桜の苗木が数十年後に枝を広げ沢山の花を付けている様子を思い描くことよって、未だ見ることのない子孫の存在を確かなものとして認める。そこに見出されるのは、次々と引き継がれてゆくいのちへの畏敬の念であり、それを表現しようとする意志である。同様のことは新潟県東部の山村でも見出すことができた。山間のこのムラでは、狭い河岸段丘を利用して田を開いてきた。**e** その中のいくつかには個人名が付せられ、例えば「十兵衛田」と呼ばれている。それは、所有者の四代前の十兵衛という人が、毎日の通常の仕事の前後の数時間、早朝と夕方遅く何十年と働き続けてこの田を開墾したことを忘れないために、そのように呼ぶのだと人々はいう。現金で米を買うことができなかった時代に、その田があるお陰で、よその家よりも消費することのできる米が数百キログラムも多いということが、どれほど大きな喜びをその家の人々に与えたか。消費するに十分な食料を金で購入できるようになった現代に生きる私達にも、その喜びのいくぶんかを想像することはできる。

**5**しかし、急速に変化してゆく社会に生きている私達は、自分の存在が、限りなくさかのぼることのできる数多くの先祖の存在によってもたらされたものであることを、理屈のうえでわかってはいても実感することはできない。まして、現在食べているもの、着ているもの、道具として使っているものが、自分たちの先祖の働きがもたらしたものとはいえない状況の中では、自分と、遠い先祖とのつながりを認識する手掛かりを、周囲の環境や日常生活の道具や住居の中に見出すことは困難になっている。そのことはまた、自分のいのちが、将来どのようにして受け継がれてゆくのかを具体的に想像する力を私達から奪っているといえよう。つまり、事例にあげた大分県東部のムラの人々が、現在咲いている桜に先祖の存在とその行為の結果を認め、一方、自分たちが植える桜の苗木に未だ見ぬ子孫の存在を認めるようには、私達は将来自分たちのいのちを受け継いで生きるであろう人々を具体的に思い描くことはできなくなっている。そしてまた、自分たちが今行っていることの結果が、自分のいのちを引き継いでゆく子や孫や曾孫たちの生活にどのような影響を与えるのかを、生

き生きと想像することができなくなっているのである。さらには、**f** 自分の中に受け継がれ留まっているいのちの意味さえも、十分に認識できなくなっていることを示しているのではなからうか。

出典 波平恵美子『いのちの文化人類学』  
(注) 河岸段丘：河川の中・下流にできる、階段状の地形。

① ———の部分**a**・**b**を漢字に直して楷書で書きなさい。

② ———の部分**A**～**D**のうち、他の三つと活用形が異なるものはどれですか。一つ答えなさい。

③ 「**c**祖先崇拜」とあるが、これはどのようなものを説明した次の文の **X** ～ **Z** に入れるのに適当なことを、五字程度でそれぞれ文章から抜き出して書きなさい。

自分の存在を **X** のものではなく、いのちを多くのものから別のものに渡してゆく **Y** のものと考えて、自己の存在を **Z** の存在と結びつけて認識するもの。

④ 「**d**同様の認識」とあるが、「伝統的社会」と呼ばれるような社会に生きている人々が「いのち」に対して感じ取るものを、文章中から四字で抜き出して書きなさい。

⑤ 「**e**その中のいくつかには……と呼ばれている」とあるが、この理由を説明した次の文の  に入れるのに適当なことを、十字以内で書きなさい。田を開墾した人の  ため。

⑥ 「**f**自分の中に……認識できなくなっている」とあるが、これについて説明した次の文の  に入れるのに適当なことを、五十字以内で書きなさい。急速に変化してゆく社会に生きる私達は、自分の存在が  が困難になっているため、自分たちのいのちを受け継いで生きる人々のことや、自分たちの行動の結果が子孫にどのような影響を与えるのかを想像できなくなっている。

⑦ この文章の構成と内容の特徴について説明したものとして最も適当なのは、**A**～**E**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

**A** **1**で具体例に触れ、**2**でくわしく説明し、**3**でそこから読み取れることを説明し、**4**ではまったく反対の例を挙げて、**5**で現状もそれほど大きな変化がないと述べている。

**I** **1**・**2**・**3**で具体例を述べ、**4**で筆者の主張を説明し、**5**で同じ考えをもう一度くりかえすことで、その正しさを読者にしっかりと印象づけようとしている。

**ウ** **1**で前置きをして、**2**・**3**で具体例について説明し、**4**でそこから筆者が読み取ったことを説明し、**5**では反対の例を挙げて社会がすっかり変わったと述べている。

**E** **1**・**2**で具体的な例を説明し、**3**でそれがどういうことを意味するかを考察し、**4**では別の例を挙げてその意見を補強し、**5**で現状がそれと反対の状態であると指摘している。

次の文章は、上田秋成の『雨月物語』の一節と、その解説文である。

受験番号
算用数字

左門いふ。「さあらば兄長このかみいつの時に帰たまり給ふべき」。赤穴あかないふ。「月日は逝やすし。おそくとも此秋は過すじ」。左門云ふ。「秋はいつの日を定めて待つべきや。ねがふは約ちかし給へ」。赤穴云ふ。「重陽こひめかの佳節をもて帰り来る日とすべし」。左門いふ。「兄長必ず此日をあやまり給ふな」。

上田秋成『雨月物語』「菊花の約」

江戸時代中頃に、上田秋成によって執筆された『雨月物語』の二話「菊花の約」で、主人公の男性二人が交わす会話である。『雨月物語』はいわゆる怪談集として扱われることが多いが、人間の存在について深い洞察がなされていて、たんなるお化け話ではない。

あらずしを追いながら、説明していきたい。

播磨はりまの国加古かこの宿（現在の兵庫県加古川市）に丈部左門という学者がいた。清貧を甘受しつつ、老母とともにひっそりと日々学問にいそしんでいたのである。ある時、左門は伝染病で苦しんでいた旅人赤穴宗右衛門に出会い、親身になつて看病した結果、宗右衛門の病氣も快方に向かった。その後、二人は学問のことも意気投合し義兄弟ちぎの契ちぎりを結ぶ。

初夏になつたある日、宗右衛門は左門に対して、旅の目的地であつた出雲いづもに行つて自分のすべきことに決着をつけた上で、再び戻つて来たいと申し出る。冒頭に掲出した会話は、そこでなされた二人のやり取りである。

「兄さん、いったいいつお戻りになりますか」「うん、月日は早く過ぎていくものだからね、どんなに遅くてもこの秋には必ず帰つてくるよ」「この秋か、それじゃ漠然としているから、もつとはつきりと日にちを決めて下さい」「そうかい、じゃ九月九日が重陽ちゆうやうの節句だから、そこまでは絶対帰つてくるよ」。「絶対ですよ。約束を破つたら嫌ですよ」。

こうやつてことばを補いながら訳してみると、左門の言い方やその内容がじつにねちっこくて、そこまでしつこくしなくてもいいのではないかという気もしてくる。しかし左門は、これまで母親の庇護ひごのもとひたすら本の世界に耽溺たんにやくしていた人なのである。社会性もなく、人間にもそう慣れていない彼が、ようやくめぐり会えた語るべき他者とたどたどしくも必死に関わりあおうとしている姿がここにはあるのであって、それを責めるのは酷かもしれない。

それに、友情というものは、あるいは友情に限らず親子・夫婦・恋人・兄弟などの濃い人間関係すべてにおいては、相手に愛着を感じて大切なものとして対する一方、その感情が強いあまり束縛してしまい、結果的に自由さや心地よさが奪われてしまう場合もある。人を愛することは**㉑**なのである。ただ、そういったことに怯おそえて、他者と関係を持つことに消極的になるばかりでも生きていく価値が失われる。束縛したり窮屈きうくつになるかもしれない危険を抱えつつ、ぎりぎりのところで愛着を相手に対して表明する、そんな平衡感覚が必要なのだろうと思う。もちろん、この時の左門には到底望むべくもないことなのだが。

もつとも、作者の秋成は、おのれの感情の赴くまま突き進んでいくこの左門という登場人物を、表面的な辻褄つじま合わせをしてうまく世間を渡っていくだけの賢さとししらな人間に対して、**㉒**逆の価値を表す存在として造型けいせいしていたふしがある。彼は国学者だから、心情が命ずるまま純粹じゆんじに行動する古代人の精神を現在生きている時代に取り戻したいという願望も抱いていたろうし、それらはもはや失われてしまつて二度と得られまいという絶望感も抱いていたろう。そういった彼の思いがこの左門という人物に投影ていけいされているように思われるのである。

この会話の後、二人はどうなったか。出雲に行つた宗右衛門は捕らわれの身になつたまま、九月九日当日を迎えてしまう。このままでは約束を果たせないと思つた彼は、「人一日に千里をゆくことあたはず。魂たまよく一日に千里をもゆく」という古人の言葉を思い出して自刃じくし、魂となつて左門のところへ戻つて来る。このあたり、左門の激情に宗右衛門が引きずり込まれてしまつたということなのかもしれない。しかし、物語の中では宗右衛門は頼るべき身内もなく、左門の母を自分の母と呼ばせてほしいと願うほどなので、左門との約束を守ることは宗右衛門にとつての存在意義しぎぎそれ自体を示すことに他ならなかつたろう。なお、もとなつた中国の話では、多忙のため約束を忘れていて、当日になつてから思い出すということになつていて、『雨月物語』の方が信義を強調

これらを読んで、①～④に答えなさい。

したものに改変されている。

待ち疲れた左門の前に宗右衛門が現れる場面は、**㉑**怪異を表現したものとして名文だと思うので、以下に掲げておこう。

月の光も山の際はしに陰くろくなれば、今はとて戸を閉たて入らんとするに、ただ看みるおぼろなる黒影かげろの中に人ありて、風の随ま来るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。

ぼんやりとした影の中に人間の姿が浮かび上がってくるというところ、只事ただごとではない怪しい感じがして、すごい。でもそれこそ、愛する兄宗右衛門だったのだ。喜び迎えた左門は、宗右衛門から事のいきさつを聞く。そして、兄の姿はかき消すようになくなり、左門と用意した酒飯のみがそこに残されていた。号泣した後、決意を胸に秘め旅立つた左門は、兄の敵討ちを遂げて、いずこへともなく姿をくらましてしまった。

出典 鈴木健一『人生をひもとく日本の古典 第三巻 つながる』

(注) 出雲：現在の島根県東部。

耽溺：一つのことにならること。

賢しら：かしこそうに振る舞うこと。

自刃：刃物で自分の命を絶つこと。

① 「**㉑**約し給へ」の読みを、現代かなづかいを用いてすべてひらがなで書きなさい。

② **㉒**に入ることばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 背水の陣
- イ 奈落の底
- ウ 世の習い
- エ 諸刃の剣

③ 「**㉒**逆の価値を表す存在として造型していた」とあるが、この内容を説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、解説文から十五字で抜き出して書きなさい。

□□ことを重視して、左門という登場人物を造つた。

④ 「**㉑**怪異」の内容について説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、二十字以内で書きなさい。

□□左門との約束を守ろうと、捕らわれの身の宗右衛門が自ら□□ということ。

中学生の宮本さんは、「日常生活で大切にしていることば」というテーマについて、スピーチをした。次の【宮本さんのスピーチ】と、スピーチに対する【石田さんの感想と質問】を読んで、①～④に答えなさい。

【宮本さんのスピーチ】

〈日常生活で大切にしていることば〉

巧言令色  
すくなし仁

今日は、私が日常生活で大切にしていることばについてお話しします。私が日常生活で大切にしていることばは、「巧言令色すくなし仁」です。

これは有名な中国の思想家、孔子の言行録である「論語」に収められていることばで、「口先がうまくて、顔つきをやわらげてこびへつらうような人は思いやりの心が少ないものだ」という意味です。みなさんも、どこかで目にすることがあるかもしれません。どうでしょうか。このことばは、他者とかわるときに相手がどのような人かを見るために役立ちます。しかし、それ以上に、自分自身が他者に対して、「巧言令色」のような態度をとっていないか振り返るきっかけにもなります。

今回スピーチをするために、改めて調べてみると、「巧言令色すくなし仁」と似ていることばに、「美言は信ならず」ということばがあることを知りました。ことばは、「美」よりも「信」が重要なのです。

私は、「信」をもった言動を心がけて、他者とよい関係を築きたいです。だから、これからも、ことばを発するときには、そのことばが心地よく聞こえるかよりも、信頼がおけるかを大切にしようと思います。

【石田さんの感想と質問】

宮本さんが言ったように、「巧言令色すくなし仁」はよく目にすることばですね。スピーチを聞いて、ぼくも改めて「巧言令色」な態度をとらないように心がけたいと思いました。宮本さんが日常生活のどのような場面で気を付けているのかの説明もあれば、聞き手の興味がさらに増しそうです。

ところで、スピーチの後半で、ことばは「美」よりも「信」が重要だという説明をしていましたが、ことばの「信」とはどういうことですか。ことばの「美」とはどう違うのでしょうか。

- ① 〈日常生活で大切にしていることば〉は行書で書かれている。○で囲んだ漢字に表れている、楷書と比べたときの行書の特徴として適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア はらいがとめに変化している部分がある。
- イ 点画が連続している部分がある。
- ウ 点画が省略されている部分がある。
- エ 筆順が変化している部分がある。

② 「これは有名な中国の思想家、孔子の言行録である「論語」に収められていることば」とあるが、宮本さんはこの部分で、「巧言令色すくなし仁」ということば自体が有名だということを伝えようとしている。宮本さんの伝えたいことが正確に伝わるように、「有名な」の位置を入れ替えてこの部分全体を書きなさい。

③ 【石田さんの感想と質問】の部分の、石田さんの感想について説明したものと最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

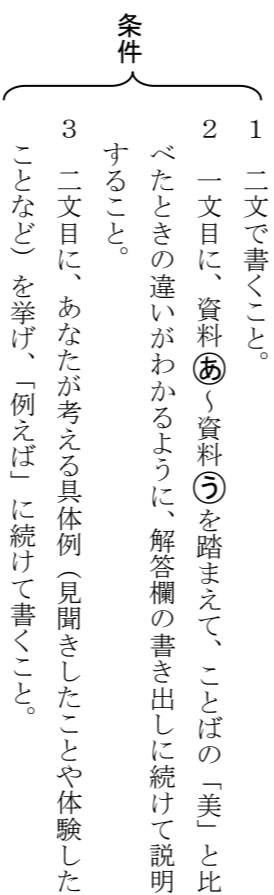
ア 宮本さんの発表に対する関心を伝えたいので、わからないところを質問している。

イ 宮本さんの発表内の質問に答えたいので、自分自身の考えを主張している。

ウ 宮本さんの発表の構成の工夫をほめたうえで、反対意見を述べている。

エ 宮本さんの発表への共感を伝えたいので、改善すべき点を助言している。

④ 石田さんから出された質問に対する答えとして、ことばの「信」とはどういうことかを、条件に従って八十文字以上百文字以内で説明しなさい。



資料⑥ 【「美言は信ならず」の解説文】

信言は美ならず、美言は信ならず。善なる者は弁せず、弁ずる者は善ならず。

信言は美しく飾り立てておらず、美言は信用に乏しい。善良な人間は多くを語らない、つまり多くを語る人間は善良ではない。

「老子」第八十一章

資料① 【漢和辞典の記述の一部】

「美」—①うまい。おいしい。②きれいである。③ほめる。

④りっぱにする。よくする。⑤よこ。

「信」—①「まこと」⑦ことばにうそがない。①気持ちや言動が誠実だ。

②規則正しい。③本当だと思ふ。

④まかせ。⑤たしかに。⑥明らかにする。

資料⑤ 【国語辞典の記述の一部】

「美言」—相手に気に入られようとする、うまいことば。

「信言」—信用できることば。真心のこもったことば。